※クリックすると記事のページを開きます。

①王立プノンペン大学からの受入留学（2016-17 年） 2
-責任感の強い日本人 2
-日本で学んだ自立と配慮 5
②王立プノンペン大学からの受入留学（2017-18 年） 8
-期待を超えた日本留学 8
-集団での生活に自分を順応させる 11
-私の「太陽の国」 15
-グローバルな友情 17
③王立プノンペン大学からの受入留学（2018-19 年） 19
-ISEP 交換留学生の歓迎会 19
-交換留学生の日常：授業と日本文化体験 21
④王立プノンペン大学からの受入留学（2019-2020 年） 23
-福島スタディツアー参加報告（2020 年 2 月） 23
-ISEP 授業の履修報告 26
-受入留学生の日本文化体験報告（2019 年 12 月） 28
-ISEP 生の留学終了報告：コロナ禍での経験 30
⑤王立プノンペン大学からの受入留学（2020-2021 年） 32
-ISEP 生の報告 1 ：将来の夢 32
-ISEP 生の報告 2 ：外大のオンライン授業を受講して得たこと 34

①王立プノンペン大学からの受入留学（2016-17 年）

-責任感の強い日本人

チア・キムヘンさんインタビュー
（王立プノンペン大学・人文学部社会学専攻 3 年）

１年間の交換留学で来ているチア・キムヘンさんに日本での留学生活についてお話を伺いました。ポーサット州出身のキムヘンさん。日本に留学しようと思った理由を聞くと、「奨学金試験に合格したから」ということでしたが、日本の文化や日本語に強い関心があるようです。

Q：日本に留学することが決まった時は？

A：ドキドキしました。早く日本に行って、文化や暮らしについて一生懸命理解したいと思いました。

Q：来日前の日本に対する印象は？

A：インターネットの情報などからでしたが、日本人の気質に好感を持っていました。例えば、時間を守ることとか、経済が発展していることとか。

Q：来日後、実際に生活を始めてみてどうでしたか？

A：到着してからが大変でした。まだ日本語もできない、電車の乗り方も乗り換え方もわからなくて、どこかに行きたくても行くことができない。それで日本人の友だちが新宿、原宿、渋谷など、いろいろなところに連れて行ってくれました。

Q：週末や時間がある時は？

A：週末は宿題や漢字の勉強をします。それから吉祥寺や新宿へ出かけたり。たまに武蔵野市国際交流協会（MIA）のプログラムで知り合ったホストファミリーとも一緒にぶらぶらします。お正月は千葉で暮らしている学生の家でホームステイをして、大晦日はスケートに行きました。

Q：日本人学生のカンボジア語のクラスのティーチングアシスタントをしていましたが、外国人がカンボジア語を勉強することについて、どんな印象がありますか？

A：カンボジア語の勉強も難しいです。発音が難しいですね。それから日本語の語は長いけど、カンボジア語の語は短いんです。日本語にない音もあるので、話すのが難しいですね。

Q：同世代の日本人の印象は？

A：日本人学生は責任感が強い。先生が課題をたくさん出しても、きちんと期日にできるし、終わるように、一生懸命やります。カンボジア人は違うんです。日本のようには（課題は）そんなに多くないけど、怠けてしまいます。

Q：日本留学の後半で何かしたいこととかありますか？

A：一つは、今以上に日本語ができるようになること。そしていろいろなところに行きたいです。広島に行って、原爆が投下され たところを見学したいです。

Q：カンボジアに帰国したらどんなことをしたいですか？

A：日本語のクラスは続けたいです。続けないと、もったいないですし。日本語をもっと話したくて、日本人との会話を聴き取れるようになりたいです。

Q：日本のどういった経験をカンボジアの友達に伝えたいですか？

A：一つは、課題をする時の経験を伝えたいです。スタイルや主題の選び方や勉強すること、すべてが違います。二つ目は、時間を守ること。カンボジアでは友達とどこかに行く約束をすると、待たされることが多いです。例えば、約束は 3 時なのに、到着するのは 3 時半。まだ移動中のこともあります。

Q：帰国して、友達が日本に留学したいと言ったら、どんなことを伝えたいですか？

A：一つは、留学する前に日本語を一生懸命勉強すること。二つ目は、日本に来たら、来たで、また別の問題がありま

す。だから、そういった問題をいくつか伝えたい。日本人とカンボジア人の文化の誤解について例えば、日本の道具の使い方とか。普通だったら、カンボジアではあまり使わない洗濯機のことなどです。

Q：将来の仕事は？

A：省庁よりも NGO で働きたいなと思っています。子どもの問題や暴力を受けている人などの社会問題に関わっている NGO で。

＜インタビュー：カンボジア語＞

-日本で学んだ自立と配慮

タン・ピセイさんインタビュー
（王立プノンペン大学・人文学部国文学専攻３年）

１年間の交換留学で来ているタン・ピセイさんに日本での留学生活についてお話を伺いました。カンボジアでは珍しい、一人っ子というプノンペン出身のピセイさん。来日前に抱いていた日本の印象と言えば、地震などの自然災害と寒冷な気候だそうで、それに慣れることができるかどうかが不安だったそう。来日して初めての冬は寒すぎて何もすることができないくらいの寒さを体験した日もあったそうです。

Q：日本に留学しようと思ったのは？

A：テクノロジーで有名な国であったことと、日本人に興味があったんです。日本人は努力を惜しまず、仕事もよくできるので、どうしたらそのように勉強や仕事がよくできるのかを留学して学びたかったんです。

Q：日本で実際に生活をしてみて？

A：少し困ったことがありました。エスカレーターは左側に立って、右側を歩きます。カンボジアでは、左でも右でもいいんです。大体の人が右側に立ちます。だから日本でも私は最初、右側に立っていたんです。何で左側なんだろうと不思議に思っていました。それから電車に乗っている時、誰もおしゃべりをしていませんね。じっと大人しくしています。カンボジアでは知らない人同士でも、話しかけたり、一緒に話したりするんです。

Q：日本の印象は変わりましたか？

A：いろいろな点で変わりました。カンボジアにいた時は、私は日本のことをあまり知らなくて、テレビ番組の中で見る程度でした。日本人はとても厳しくて、あまり寛大ではないのかなと思っていたんです。でも日本に来てみれば、日本人はしっかりしているけれども、愛想もよくって、けっこうお互いに対して寛大でした。

Q：日本での生活で大変なことは？

A：日本語には漢字がたくさんあることです。だから出かけたり、買い物をする時が大変です。何のために使うものなのか、どう使うのかがわからなくて大変です。会話をするのも難しいです。日本人は実際は英語ができるのに、あまり話さなくて、大体の人は日本語で話してしまう。どこかに行きたい時、道をたずねるのが難しいですね。

Q：カンボジアが恋しくなりましたか？

A：家や両親が恋しくなりました。一人暮らしを今までしたことがなかったので、家が恋しいですし、カンボジアや一緒に勉強していたクラスメートが懐かしいです。

Q：週末や時間がある時は？

A：宿題をするほか、料理をします。カンボジア料理を食べたくて、自分でつくるんです。そのほか、近所の公園を散歩したり、ショッピングに行ったり、両親とインターネットで通話をしたりします。

カンボジアの食材はカンボジアから持ってきました。プラホック（魚醤をつくるときに残る塩辛）、タマリンドペースト、カレーペースト、ウコン、レモングラスとか。まだ残っているけれど、古くなってきているのが問題ですね。なくなったら、中野に買いに行きます。

Q：日本のお正月は？

A：ホームステイをしました。テレビを一緒に見たり、おせち料理を食べました。夜 12 時になったら神社へ行って、絵馬に願い事を書いたり、おみくじを引きました。人もいっぱいいて、出店もたくさんありました。

Q：これから留学の後半で何かしたいこととかありますか？

A：夏に富士山に行きたいです。遠くから眺めるのでもいいです。それから、日本の文化に関わるお祭りや行事にいろいろと参加してみたいです。文化に興味を強く持っています。

Q：興味深い授業は？

A： 日本語と英語のクラスだけなんです。バングラデシュの文化は習いました。生活が似ています。両親を尊敬したり、家族で暮らすことを好んだり、子どもが自分独りで何かを決定するということはないんです。それから社会問題がカンボジアとも共通していて、交通渋滞の問題、工場労働者の多さもプノンペンと共通しています。

Q：カンボジアに帰国したら？

A： 日本での経験を伝えたいです。留学を希望する後輩にも、日本でのくらしがどんなものかを伝えたり、びっくりするような問題を避けられるように伝えたいです。例えば、エスカレーターのこととか、電車の中でおしゃべりをしないといったカンボジアとの違いだったり、日本で暮らすには、ちゃんと自立して、いろいろと配慮しながら暮らすことが必要なんだということです。

Q：卒業後の希望は？

A：まず、きちんと卒業して、教員試験に合格することです。高校で国語の先生になりたいんです。できれば大学で教えたいです。

Q：おススメの本は？

A：『パイリンのばら』[ニョック・タエム（1930-1974）著、1943]です。「人を差別してはいけない」ということと、努力の大切さを伝えています。主人公の努力が実るハッピーエンドで、読後感は楽しいです。 最近では、王立プノンペン大学国文学専攻ユー・ソピア先生の『天に卒業証書を見てもらおう』です。学業の中で努力をすれば結実する。ただ人に付いていくだけでは、卒業証書を手にしたとしても意味がなく、仕事もできないというような内容です。

②王立プノンペン大学からの受入留学（2017-18 年）

-期待を超えた日本留学

シム・ダネーさんへのインタビュー

（王立プノンペン大学人文学部社会学専攻 3 年生）

コンポンチャム州から首都の王立プノンペン大学に進学し、さらに日本に留学したダネーさんに、将来のこと、日本の印象などをうかがいました。

Q：東京外国語大学の交換留学プログラムへの応募のきっかけは？

A：学部長から公募について聞きました。言語能力が心配だったのですが、先生が、「応募すれば機会はあるけれど、応募しなければゼロに等しいよ」、と言ってくださいました。また、「もっと知りたければ、去年このプログラムで留学していた先輩に聞きなさい」と言われ、先輩にたくさん質問をしました。申請書に何を書いたらよいのか、日本に行くには何を準備したらよいのか、を聞きました。

Q：先輩は何が一番必要と話していましたか？

A：日本では、みんな時間を守ること、約束をしたらキャンセルする時は必ず事前に相手に伝えることなどです。

Q：日本への留学に関心があったのは？

A：日本について知りたかったんです。フェイスブックで見ると、日本はどんなところでも列になって並ぶような秩序がありました。日本の教育や技術の進歩について、自分の目で見てみたいと思いました。

また、新しい経験を得たいとも思いました。文化について学びたかったのですが、東京外国語大学は留学生が多いと聞いたので、いろいろな民族の様々な文化を多く学べると思いました。

Q：日本に来てみて、カンボジアで思っていたことと違う！という失望は？

A：期待を超えたことしかありません。フェイスブックで見たり、人から聞くのは「へえ、そういうのが日本なのか」というだけで

した。でも日本に来て、単なるイメージを超えて、新しい世界を知ることができた、と考えています。

Q：他の国から来ている留学生は？

A：それぞれ異なる文化があって、最初は少し大変だなあと思っていました。お互いの文化がわからなくて、時々、「カンボジアではそうはしないのに」ということがあります。例えば、率直に話すのが好きな人もいるけれど、カンボジア人なら、率直に話すと友達が不快に思うのではないかとむしろ心配します。

Q：趣味は？

音楽を聴いたり、小説を読むのが好きです。現代の作品は恋愛物が多くて、あまり好きではありません。昔の作品には社会についての葛藤があります。時々、本を通して登場人物に入り込んで泣いてしまうんです。例えば、『新しい太陽が古い大地に昇る』[スオン・ソルン、1961]では、生活苦を抱えた夫婦の出産間近のやりとりのシーンで、涙がとまりません。

Q：将来の夢は？

A：政府機関で働きたいと思っています。女性の権利の促進が重要だと思っていて、他の女性の様子や、女性として自己実現するために大切にしたいことを知りたいと思い、女性事業省に興味を持つようになりました。

また、いつか、自分のビジネスを持ちたい、コーヒーを飲みながら、本を読めるようなカフェを開業したいとも思っています。以前は本は好きではなかったのですが、プノンペンに進学してから読むようになりました。

Q：女性の権利について考えるようになったのは？

A：高校を卒業して大学の専攻を選ぶ際に、卒業後、家の近くの銀行に就職できるからと、会計学や経営学を勧められたのですが、その理由は、女性はあまり外出する必要はない、ということだったからです。

Q：東京外国語大学の授業は？

A：一番関心があるジェンダーの授業を取ろうとしたのですが、残念ながら希望する学生が多すぎて取ることができなかったんです。でも日本人の学生から、共働きの家庭で男性が家事を分担すべきと考えないという問題があると聞きました。

カンボジアでも家庭によっては同じ状況があります。

また、今、文化の授業を受けていますが、それぞれの国で日常のコミュニケーションの中で使われているジェスチャーについて少し学びました。日本を今以上にもっともっと知りたくなりました。

Q：故郷のコンポンチャム州の見所は？

A：ドリアンが美味しいことで有名です。また、川祭りの時期は、沿道にたくさんの屋台が出たり、街中がイルミネーションできれいです。

Q：コンポンチャム州の将来についての期待は？

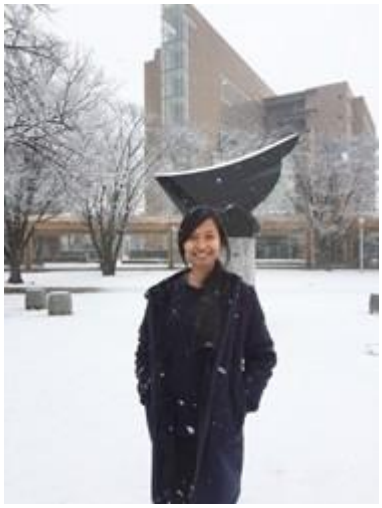
A：道路がとても不便ですが、2018 年の選挙後に工事をするという計画はあるそうです。それから私の村は高等教育への進学率があまり高くないんです。そういう生活環境なので、他の人も進学を考えられるように変えていきたいんです。教育を受けて、知識があれば、何か問題に直面した時に解決する方法を見つけられるようになるからです。

Q：授業時間外の日本語学習は？

A：文字をたくさん書いて、手で覚えています。寮の部屋でインターネットで日本の歌を聴くのが好きです。聴いても日本語の歌詞の意味まではわからないのですが、聴いていて曲の感じがとてもよいです。

Q：帰国後の日本語学習は？

A：やっといくらかできるようになったので、さらに使えるように勉強するつもりです。



-集団での生活に自分を順応させる

ラオ・ソクヘンさんへのインタビュー

（王立プノンペン大学人文学部国文学専攻 3 年生）

世界遺産アンコール・ワットのあるシェムリアプ州から首都の王立プノンペン大学に進学し、さらに日本に留学したソクヘンさんに、カンボジア文学や、人生観、日本で感じたことなどをうかがいました。

Q：日本留学のきっかけは？

A：欧米やオーストラリアにも興味はありましたが、一番最初に巡り合った機会が日本でした。1 年生の時、2 年次に日本に留学できる奨学金について先輩が話してくれました。それで東京外国語大学に留学した経験のある国文学専攻の先輩たちと仲良くなって、奨学金を得るにはどのように準備したらよいかを聞きました。

奨学金に合格したら、今度は日本での生活に必要なことや、日本での生活がカンボジアとは大きく違うことをいろいろと教えてくれました。特に気候が寒いということなどです。

Q：留学の目標は？

第一に、新しい経験を得ることです。もし自分が一人前の人間になりたかったら、他の社会に入ってみることです。私たちは「井の中の蛙」ではいられません。様々なものを得るために自分の地平を広く開かなければなりません。留学は、日本文化など知見を広める最も意義のある機会です。日本は世界の経済大国ということで、世界最良の日本の教育制度について、カンボジアとどのように違うのか、知りたいのです。

第二に、文化を伝えることです。カンボジアの伝統文化を日本の学生や様々な国からこの大学に留学してきている学生に伝えたいのです。私も自分の成長のために日本の学生や各国の留学生からそれぞれの文化に関わる知識を得たいです。自分を成長させたいのなら、エゴイストになってはいけないと言われます。お互いに助け合って、知識をシェアし合うということです。

第三に、自分を成長させるということです。チャレンジして、新しい知識を得たら、自分の成長につながります。そして自立

することにつながって、自信にもなると思うんです。「川では川の流れに従うように、郷に入ったら、郷に従え」とカンボジアでは言いますが、社会の中で、集団での生活に自分を順応させるといった、日本人のライフスタイルから多くを知ることができます。

Q：日本のイメージは？

A：日本は発展した国で、技術にもスピード感があると思っていました。特に一番好ましい日本人の習慣は、時間を管理するということです。大部分の日本人は時間を管理していて、時間をよく守ります。

来日してみて、自分自身を適応させる、特に時間が管理できるようになることは、本当に良いことだと思います。待ち合わせをしたら、ただ間に合うようにするだけです。ぐずぐずして急ける必要はないんです。日本で歩くテンポは、カンボジアでは走るテンポです。4、5 分間でさえも、本当に貴重なものと考えています。カンボジアでは待ち合わせということが大変で、2 時の約束でも 2 時 15 分とか、2 時 30 になってやっと会えるんです。

Q：東京外国語大学で授業補助をしてみた経験は？

A：カンボジア語を専攻している日本人学生が一生懸命学習している様子をみて、嬉しいです。カンボジア文学の分野で学習をお手伝いできることも光栄です。

Q：国文学を志望したのは？

A：ずっと国語が好きで得意科目でした。特に高校では様々な文学作品に触れることで過去の社会を知り、人間の様々な問題の解決のアイデアを、私たち自身の経験と重ね合わせて考えることができました。

例えば、チュオン・メーンの詩『ポル・ポト、イエン・サリ時代のクメールの大地を見よ』[1980]は、ポル・ポト政権下のカンボジアの苦難を述べています。社会の問題以外にも、文学作品からは、文化や伝統、様々な文明などを含めて多くのことを学ぶことができます。

Q：自分で創作したことは？

A：小説を書いたことはあるけれど、出版はしていません。「文学は国の魂」と言われています。もし国の文学を喪ったら、

国のアイデンティティを喪うということです。私がカンボジア文学を学ぶということは、カンボジア文学を守っていくと同時に、さらなる発展に貢献できるということでもあります。

Q：最近の文学の中で紹介したい作品は?

A：チュット・カイさんの『寺の子ども』、『フランス学校の子ども』、『かわいい水牛の子』[岡田知子訳『追憶のカンボジア』東京外国語大学出版会所収]です。この作品の意義は、フランス時代、ポル・ポト時代の人々の生活に関して、自分自身の体験を語っていることです。この作品を読む時、私たちはその出来事の中にいるように感じ、いろいろな出来事を乗り越える一人の人間について、まるで本人の語りを目の前で聞いているように思えます。

また、国文学専攻の教授の一人で現在 2 年生でライティングの科目を教えているユー・ソピア先生は、優秀な作家で多く受賞されていて、現在のカンボジアの若者が直面する問題、入学の問題や恋愛であったり、社会の幸福のない状況や麻薬の問題などをテーマに作品を発表されています。

Q：首都プノンペンへの進学は？

A：地方の高校生が進学することは大変です。大学生活を始めてみて、学業も、都会での生活も、全てが初めてのことばかりでした。でも奨学金を受けて大学に入学するということは、自分の夢に踏み出す第一歩だと意識していたので、楽しいことでもありました。

Q：国文科の授業は？

A：クラスには入学当初 90 人程いました。教員採用試験を受験したり、実家へ戻らないといけない学生もいて、おそらく今は 60 人くらいだと思います。ベトナムやラオスからの留学生とも一緒に勉強しています。1 年生は歴史など教養科目を学びます。2 年生になると文学に関係のある科目となっていきます。パーリ語、サンスクリット語は 2 年生の前期、後期で学びます。そして碑文や音声学も学びます。

Q：碑文を読めますか？

A：少し読めますが、全ての意味はわかりません。授業ではグループワークとして、国立博物館に行き、碑文を現代クメー

ル語に訳します。善行について、また、牛、水牛、土地といった寄進物について記されたものが多いです。

Q：プノンペンでのアルバイトは？

A：学期中はしませんが、長期休暇中には、学内で先生のアシスタントをして、留学生のカンボジア学習の教材づくりをお手伝いしました。テキストを読み上げて、音声を録音するのを手伝いました。

Q：将来は？

A：公務員の仕事を探そうと思っています。大学の教授であったり、内務省や労働省など、いずれかの省庁に勤めるのであったり、さらに、可能なら地元で小さなビジネスをしたいと思っています。

Q：自身の成長とは？

A：高校生の時から考えていました。「無学だと食が得られず苦労するから、一生懸命勉強をするように」と先生から言われました。

両親は、私が勉強できるように全面的に懸命にサポートしてくれました。私は自分を成長させられる勉強の機会をしっかりと活かさなければなりません。知識があれば、ふさわしい仕事に就職できます。お給料で自分の生活ができ、家族を養うこともできて、両親も嬉しく思うでしょう。そうなれば、生活に苦しむことなく、快適に暮らせるようになれると思うんです。まず自分を成長させるのです。

-私の「太陽の国」

シム・ダネー

（王立プノンペン大学人文学部社会学専攻 3 年生）

ダネーさんのスピーチは本学 YouTube: TUFS Channel からご覧いただけます。

・日本語でのスピーチ

・カンボジア語でのスピーチ

2017 年 9 月 24 日、私は日本に旅立ちました。幼い頃、父に「飛行機はあんなに小さく見えるのに、どうして人を乗せることができるのか」と尋ねたことがあります。父は、「飛行機は小さくないよ。とても遠くにあるから、小さく見えるだけさ。もし飛行機に乗りたいなら、留学を目指してがんばって勉強しなさい」と言いました。私の夢は現実になりました。

日本に到着し、インフラや周囲の美しい環境といった様々な整然としたものをみて、いつの日かこれらのものを自分の国でも見たいと思いました。テクノロジーと工業が発展した国と思っていましたが、無機的な建造物だけではなく、見る者を飽きさせない爽やかで美しい緑があちこちにありました。

東京外国語大学ではチューターが書類の手続きなど様々なことを手伝ってくれ、勉強以外にも、買い物や生活のしかたを教えてくれ、色々なところに連れていってくれました。面白いことを言うのが好きなチューターのおかげで、日本に来てから笑うのを忘れていた私は、以前のように笑えるようになりました。チューターは私の友達でもあり、先生でもあり、お姉さんでもあり、保護者でもあり、一緒にいると家族とともに過ごしているような温かい気持ちになりました。

大学のキャンパスは心安らぐ緑で溢れていました。秋になって木々が競い合って葉っぱの色を変えていく様子を、私は初めて目にしました。太陽の光を浴びて黄金のような葉は、地面に散ってもあたり一面に敷かれた麗しい絨毯のようで、SNS でしか見たことのなかった景色をこの目で見ることができ、勉強で張りつめた気持ちを歩き回って和らげるには最高の季節でした。

お正月には、カンボジア語を学んでいる友達の福井の実家に連れて行ってもらいました。バスから降りると、周りが真っ白でした。私は感動して、叫びたい気分でした。昔、ドラマで、口から白い息を吐き出しながらしゃべり、雪の上を歩いている人を見たことがありますが、実際に自分で体験してみると、ドラマで見た以上に感動しました。地方に行っても、日本はどこもかしこも発展しているように感じました。カンボジアもその半分ほどまで発展することを願っています。

私は日本に来てから一日も孤独を感じた日はありませんでした。たくさんの日本人の友達が親切にしてくれました。みんな、私にとって家族のような存在です。日本に住んでみて、それまで特に何の感情も抱いていなかった日本が好きになりました。想像を超える日本の素晴らしさに出会い、日本は東南アジアにある私の小さな国とは比べられない「太陽の国」と呼ばれるにふさわしいと感じました。

（原文：カンボジア語）

-グローバルな友情

ラオ・ソクヘン

（王立プノンペン大学人文学部クメール文学専攻 3 年生）

ソクヘンさんのスピーチは本学 YouTube: TUFS Channel からご覧いただけます。

・日本語でのスピーチ

・カンボジア語でのスピーチ

東京外国語大学で始まった学生生活が、2 年前、王立プノンペン大学に入学した時と違うのは、異なる国々から来ている留学生と一緒に学ぶこと、制服を着る必要はないこと、履修科目を決める前に、授業を体験するために一週間与えられていることでした。カンボジアでは、大学で決められた科目以外に選択することはできません。また、東京外国語大学では、教材の学習よりも、自己学習に大きく力を入れています。

私は、午前中は日本語を学び、午後は専門である文学関連の科目を英語で学びました。それぞれの授業で、他の学生に会えるのは週に 1 度だけで、授業後は、10 分間で急いで次の授業の教室へ走らなければいけないので、あまり親しくなる機会はありませんでした。

来日前の日本のイメージは、高層ビルが隙間もなくひしめき合っているというものでした。しかし、日本ではどこにいても常に自然が混在していました。人が集中して歩く隙間もないような、重要な商業地区も、首の筋を違えるばかりに見上げる高層ビルのある新宿の中心でさえ、大きな公園を擁しています。沿道には花を咲かせるものや、大きく枝を展開させる大小の樹木があります。私は、日本人が週末の時間を自然と共に過ごすことに気づきました。また、世界中の大部分の人々が肉を好んで食べる中で、日本人は肉よりも野菜を多く摂り、食事にも自然を取り入れて、健康的に生活しています。さらに驚くべきことに、この国ではどんな場所もきれいでゴミ一つ落ちていません。日本はおそらく、「ゴミを責任持って捨てられるようにしつけることは、ゴミを拾うことのできる人間になるようしつけるより、素晴らしいことである」という理論を実践している一番の国です。大学でも教室の中はもちろん、どこもきれいに清掃されているので、積もっている埃をきれいに拭かなくても座れます。寮の中の階段あるいはエレベーターでさえ、手すりやタイル、様々な場所も常にきれいに拭かれています。

日本に来る前、私にとっての「雪」は、気温が低くなったとき、空から降ってくる白色の氷の粒、という単なる言葉でしかなく、テレビや写真でしか見たことのないものでした。カンボジアでは、「もし雪の降る国に行ったら、かき氷にかけるシロップとミルクを持っていくのを忘れるな」と冗談を言いますが、まさか私自身がこの手で実際に雪をさわれるとは思いもしませんでした。人生で初めて雪を見たときのことはずっと忘れられません。2017 年 12 月 27 日、福井にある友人の実家に遊びに行き、初めて雪をこの目で見ました。東京に戻ってくると、もう雪を見ることはできないと思いました。しかし、信じられないことに 1 月 22 日、東京に大雪が降り、大学のキャンパスを真っ白に染め上げました。膝の高さまで積もった雪のおかげで、もう一度楽しい雪遊びをすることができました。

留学中の孤独は、チューターや友人たち、ホストファミリーの存在によって、緩和されました。皆、いつも私たちの食事から、生活面、外出、勉強のこと、手続きなどあらゆる面で助けてくれました。
毎日放課後には、いつもカンボジア語科の研究室に行っていました。研究室に置かれているカンボジア語の本の中には、カンボジアの図書館でも出会うことができないような本もありました。
この部屋は、カンボジア語科の学生が互いの経験を共有しあったり勉強したりする場であると同時に、先輩と後輩が交流する場でもありました。昼食の時間になると、一緒に昼食をとるためにみんな研究室に集まります。私にとって研究室は、カンボジア語科の学生と交流させてくれる場でした。ここのおかげで、私は先生方や友人と会話をすることができたのです。私は研究室から聞こえる笑い声を覚えています。カンボジアに帰ったらこの部屋のことを懐かしく思うことでしょう。

（原文：カンボジア語）

③王立プノンペン大学からの受入留学（2018-19 年）

-ISEP 交換留学生の歓迎会

カンボジア王立プノンペン大学（RUPP）から、3 人の交換留学生が来日しました。チャントラーさん（RUPP カンボジア文学科 3 年）、クンティップさん（RUPP 社会学科 3 年）、ソロンさん（RUPP 社会学科 3 年）です。

2018 年 10 月 18 日（木）の昼休みに、カンボジア語共同研究室で、交換留学生のウェルカムパーティーを開催しました。3 人は、本学でカンボジア語を専攻する学生約 20 名と持ち寄りの軽食を食べながら、会話を楽しみました。

歓迎会の様子（右端がチャントラーさん）

歓迎会の様子（中央右がクンティップさん、中央左がソロンさん）

まだカンボジアを訪れたことのない 1 、2 年生も参加し、交換留学生が持ち寄ったカンボジア料理の説明を通して、カンボジアの文化に触れました。

チャントラーさんは、今年 2 月のショートビジット・プログラム（RUPP カンボジア文学科正規生クラス参加プログラム）の際に、本学の学生とは既に交流がありました。

チャントラーさん、クンティップさん、ソロンさんは、本学の ISEP-TUFS プログラムに参加します。秋学期は、日本語総合、実践英語、思想文化論、ことばとコミュニケーション、国際協力論などを学びます。

チャントラーさんとソロンさんにとっては、この日本への留学が初めての海外渡航なので、日本人学生や、本学に留学生として在籍している外国人学生と積極的に交流し、異文化への理解を深めたいと語っていました。

また、チャントラーさん、クンティップさん、ソロンさんは、授業補助として、カンボジア語のクラスにも出席しており、カンボジア語教育の学習補助にも意欲を示しています。10 か月という短い期間ではありますが、本学から学ぶだけでなく、本学の学生に良い影響を及ぼしてくれることに期待が高まります。

なお、チャントラーさんの記事は、カンボジアのウェブ雑誌 Sabay に掲載されました。

「留学生が見た日本」（2018 年 10 月 25 日）

チャントラーさんは、以下の点を紹介しています。

・日本人は礼儀正しく親切で、助けを求めると寛大である。

・いたるところが清潔で秩序正しく、誰もが環境整備に協力する。

・レストランなどで空いた席があっても勝手に座らず、相席していいか尋ねる。

・節約とリサイクルに熱心で、食べ物も残さず食べる。

・リサイクル可能な冷蔵庫などを捨てるには料金がかかる。

・公共の場所では写真撮影が禁止されていることがある。

・ＳＮＳにアップする前に、被写体の許可を得る必要がある。

・バスや電車といった公共交通機関が 1 秒単位で時間に正確である。

・公共交通機関では携帯での通話が禁止されている。メッセージは送信できる。

・男性会社員は、給与の額にかかわらず黒いスーツを着て黒い鞄をもっている。

・女性は、平素な服装で、薄化粧で、西洋人と比べると喫煙者も少ない。

・子どもたちは行儀がよくかわいい。自分たちで安全に道路を横断できる。

・店員は常に笑顔で明るく、客につきまとわない。

・どこでも 24 時間稼働の自動販売機がある。

・広告やチラシは QR コードがついていて、詳細な情報が入手できる。

-交換留学生の日常：授業と日本文化体験

カンボジア王立プノンペン大学（RUPP）からの 3 人の交換留学生は、東京外国語大学で、日本語のクラス以外に、英語で行われるさまざまな授業を履修しています。また、課外では、日本文化も体験しています。

１）秋学期の授業

チャントラーさんは、異文化コミュニケーション（Topics in Intercultural Communication）の授業が一番のお気に入りです。この授業には様々な国からの留学生が参加しており、互いの文化について実際に質問をしながら学びあうことができます。グループでのプレゼンテーションもあり、チャントラーさんは日本人学生だけでなく、コロンビアやイギリスからの留学生と共に 7 人で、各国のあいさつの仕方や、ボディーランゲージの意味の違いなどについて話し合い、発表を行っています。

２）納豆に挑戦

カンボジア語専攻の 1 年生の発案で、納豆を食べる会を開きました。一から食べ方を教わり、自分で納豆をかき混ぜていました。初めて食べた納豆の粘りと苦みを味わったそうです。

納豆に挑戦

３）日本舞踊のワークショップ

10 月には、東京アート＆ライブシティ「初めての日本舞踊―日本の文化と人を知ろう」のワークショップに参加しました。着物を着せていただいた後に、男舞と女舞、それぞれの舞踊を教えていただき、日本の伝統的な音楽を聴くこともできました。ワークショップの最後には、間近で先生方の演舞を観賞することができました。

左から、チャントラーさん、ソバタナ先生、クンティップさん、ソロンさん

４）生け花を体験

大学の国際交流会館で開かれている、留学生のための生け花教室に参加しました。どのように生けたら美しく見えるのか、日本ならではの美の感覚を、先生に

手直しをしていただきながら学ぶことができました。生け花教室が終わった後は、生けたお花を持ち帰り、しばらくの間自室に飾り楽しみました。

④王立プノンペン大学からの受入留学（2019-2020 年）

-福島スタディツアー参加報告（2020 年 2 月）

本学の世界展開力強化事業 COIL 型が主催する就業体験科目に本事業の受入学生が参加しました。この科目は日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）の協力のもとに実施され、事前学習（2 月 4 日）、福島でのボランティア型フィールドワーク（2 月 6 日～9 日）、事後のカリフォルニア州立大学ノースリッジと繋いだ COIL 型のオンラインセッション（2 月 12 日）で構成されます。プログラム日程は以下の通りです。

日時	内容
2/4（火）	事前学習：日本の非営利団体業界の紹介、福島での災害支援の歴史と現状の報告など
2/6（木）	福島県いわき市に移動、長源寺の副住職による講話、座禅体験
2/7（金）	ゆうゆうファームでのボランティアワーク、富岡町-楢葉町視察、久ノ浜の浜風きらら訪問、震災体験に関する講話
2/8（土）	台風被災地でのボランティアワーク、菩提院の副住職による講話
2/9（日）	いわきオリーブプロジェクトでのボランティアワーク、東京へ移動
2/12（水）	事後報告会：カリフォルニア州立大学ノースリッジとの COIL 型オンラインセッション（詳細はこちら）

参加したカンボジアからの交換留学生の体験報告が届きました。詳細は以下をご覧ください。

世界展開力強化事業（ASEAN）コーディネーター

寺井淳一記

福島でのボランティア活動

トリー・スライレアク

福島県は自然災害の被害を強く受けた県です。2020 年 2 月 6 日から 2 月 9 日の間、私はボランティアとして福島を訪れ、長源寺での宿泊、オリーブ畑での農作業支援、立ち入り制限区域の見学などの活動に参加しました。

１．長源寺での宿泊

氷点下の環境に働きに行き寺院に泊まることは初体験でした。寺院では、1 階は男性用、2 階は女性用で、掃除、静粛、衛生などの規則を守らなければなりません。長源寺は毎年ボランティアを受け入れています。暖房が遠かったため寝袋に入ってもまだ寒く、初日は 3 時間しか眠れませんでした。

初日は、住職さんから福島県の自然災害とボランティア活動についてのお話をうかがいました。その後、瞑想を体験しました。初めてだったので 15 分だけでしたが、被災した方々が狭い避難所で身動きもできず、水も食料も十分でない状況を思い浮かべることが目的でした。瞑想して雑念をはらうことで、被災者の苦しみに思い至ることができるのです。3 日目に、もう一度瞑想しましたが、たった 25 分間で耐えられない気持ちになりました。長期間狭い場所にいなければならなかった被災者はどれだけ苦しかったことでしょうか。

２．オリーブ畑

オリーブ畑にて

2 日目と 3 日目は、グループに分かれて活動しましたが、4 日目は、全員でオリーブ畑で作業をしました。このツアーでは食事は自費でしたが、オリーブ畑では食事をいただきました。

落ち葉を集め、オリーブの木のまわりに穴を掘り、肥料を入れ、穴を埋めてから糠のようなものを砕いて撒く作業をしました。私にとって、作業は苦ではありませんでしたが、気候はつらかったです。その日の気温は 3, 4 度で、震えながら仕事をし、手足の指が凍ってしまいそうでした。その上、仕事が終わったら冷たい水で手を洗わなければなりませんでした。

とても寒かったとはいえ、ボランティア全員が一致団結して仕事をする様子を見て本当に感動しました。私たちは福島での 4 日間を通して深い結びつきを得ました。

オリーブ畑では、自然災害はインフラや農作物だけではなく人命も奪ったこと、私たちへの期待とし勉学に励んで知識をいかし産業を発展させてほしいこと、オリーブの実は美容と健康に効果があることをうかがいました。

３．立ち入り制限区域の見学

福島では、仕事場まで 20 分歩いても 10 人ほどにしか出会わなかったこと、大きな店でも、店員は 3 人、お客さんは 5 人しかいないことに驚きました。もちろん大きな被害を受けたとは知っていましたが、こんなに住民が少ないとは思っていませんでした。

2 日目に見学した地域には、立ち入り制限区域がありました。制限されていない区域でも、他の県のようには人がいませんでした。制限区域では、放置された家や道路、学校、工場、会社や、修復工事をしている人を目にしました。

その後、被災者の動画や写真がある資料館を見学し、避難するのに大変な思いをし、自然災害に家や財産、愛する人までも奪われた方々を心から気の毒に思いました。

４．学んだこと

3 泊 4 日の福島ツアーはとても疲れましたが、他者のための活動ができたのは嬉しかったです。このツアーを通じて成長し教訓も得ることができました。困っている人を助ける方法です。昨年 8 月、カンボジアのシハヌーク州は洪水の被害を受けました。日本の洪水ほどではありませんが、カンボジアでは大きな災害でした。私は被災者を助けたい気持ちはありましたが、大学 2 年生で仕事もお金もない自分には何もできないと思っていました。福島でのボランティア活動を通じて、人を助けるために高い身分や地位、大金持ちである必要はないとわかりました。困っている人を助けるためには、少しの時間と予算があればボランティアができます。少しであっても助け合いには価値があります。自然災害を止めることは誰にもできないけれど、自然災害の被害者を助けることはできるのです。

-ISEP 授業の履修報告

トリー・スライレアク

東京外国語大学では ISEP 生が選べる選択自由科目が 49 種類ある。私は、日本語科目の他に、国際法、ビジネス、異文化コミュニケーション、トルコ文学、日本と諸外国間の協力、スロヴェニア文化の授業を受講した。本報告では、その中から 3 科目を選び、提出課題を中心に授業で学んだことを紹介する。なお、これらの授業は英語で行われた。

授業 1　＜通訳者のためのビジネス英語＞

約 40 人の留学生が履修するクラスだった。ブランドの重要性、起業方法などを学んだ。クラスでは大きな課題が 2 つ出された。

課題 1 ：自分が働きたい会社について述べる

私が取り上げたのは、世界的にも有名なスポーツ用品メーカーである。私は運動をするときだけではなく休日にもスポーツウェアを着るのが好きだが、そのメーカーのウェアの材質はとても心地よく、大学の制服やそのほかの私服よりも着やすいからだ。

課題 2 ：将来 10 年間の具体的な計画をたてる

私の計画は以下の通りである。既に書き上げていた長編小説『女子学生』を 2020 年 3 月中に出版する。大学卒業後は、カンボジア女性の権利向上に関わる仕事をしたいので、女性省を目指して国家試験に合格する。作家として執筆活動を続けるだけでなく、ブックカフェのオーナーとなる。教育の機会に恵まれない子どもたちへの支援活動を行う。

この授業を履修する前は、公務員やスモールビジネスについて漠然と考えていたが、ビジネスというのは資金があるだけでは成り立たないということが具体的に理解できた。例えば、本を出版後、販路を確立させ、読者と作家とのコミュニティを形成することなど、授業を通してヒントが得られた。

授業 2　＜異文化コミュニケーション＞

約 30 人が履修するクラスだった。課題として、個人間やグループ間での誤解について、具体的な事例をもとに分析、

考察することが出された。

私が取り上げた第一の事例は、「香港出身の学生がカンボジア文化を理解するのは容易ではなかった」ことだ。昨年、カンボジアで、香港の学生たちと交流する機会があった。その学生たちは事前にカンボジアの伝統文化や社会の基礎について学んでいたが、「女子学生が夜に出歩くのは非常識である」ということを理解していなかった。香港の学生にとっては、男女のグループで夜に飲食店に行くのはごく通常のことかもしれないが、カンボジア社会では、好ましくないことだと考えられている。

第二の事例として、「アメリカ帰りの若いカンボジア人男性が、屋内でも帽子を取らないままにいることに違和感を覚えた」ことを取り上げた。

いずれの事例も、相手の行動の理由が理解できていれば、違和感を持たなかったと思う。そのためにもしっかりとしたコミュニケーションをとることが重要だということを学んだ。この講義で学んだ知識は、将来異なる文化圏の人々とのコミュニケーションを円滑にしてくれるだろう。

授業３　＜大衆文学におけるトルコ女性像＞

トルコ人の先生と 9 名の学生のクラスだった。1920 年代のヨーロッパ大陸、とくにトルコ女性の生活や文学の中のトルコ女性像、現代のトルコ女性の生活について学んだ。

これまで 1920 年代のヨーロッパ大陸の様子について知る機会が少なかったこともあり、非常に興味深く学ぶことができた。工業化とともに、衣服、音楽など文化面も発展し、電化製品の生産、使用へと繋がっていく様子がおもしろかった。

課題：文学作品に描かれている社会と現代社会を比較する

私はカンボジア版のロミオとジュリエットといわれる、中世の史実をもとにした悲恋物語『トムとティアウ』を取り上げた。結婚に際してよく使われる表現「お菓子は器より大きくない」（「大人の言うことには従え」の意）は、この作品からの引用であり、親が決めた相手と結婚するべきである、というたとえで使われる。物語の女主人公ティアウは、愛するトムではなく、財産と地位のある男性と結婚するよう母から強いられる。またこの時代は国王の権力が大きかった。現在のカンボジアは、法律のもとに個人の権利が保障された民主主義国家であり、愛する相手と結婚する権利もある。しかし、現在でも古い考えを放棄しない親が一定数存在することも確かだ。

-受入留学生の日本文化体験報告（2019 年 12 月）

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」では、東京外国語大学の学術交流協定校であるカンボジア王立プノンペン大学から、交換留学生を受け入れている。留学生は、東京外国語大学の学生と交流する中で日本の社会や文化を体験している。以下は、2019 年―2020 年に留学したトリー・スライレアクさんの「日本文化の体験」についての報告である。

文化の歴史を知るはじめの一歩―カンボジア人の目に映った日本の文化―

野口亜依

王立プノンペン大学からは毎年、1 年間の交換留学生を受け入れています。留学生たちにはカンボジア語学習を手伝ってもらったり、プライベートで遊びに行ったり、様々な交流を行っています。去年の夏から今年の夏にかけては、トリー・スライレアクさんが来ていました。以下に、2019 年の 12 月末 3 泊 4 日で、秋田県へ行った経験から、スライレアクさんが感じた日本文化について紹介します。

秋田での初日は、2 人で秋田駅周辺を探索し、秋田の代表的な城の一つ、久保田藩主佐竹氏の居城の久保田城へと行きました。スライレアクさんも「江戸時代」、「城」という単語はカンボジアにいる頃から知っていたそうなのですが、観光名所としてのイメージを抱いていていました。天守閣の周りにある広大なお堀と、城内の敵を防ぐさまざまな工夫、また昔の建物の姿を長年そのままに美しく保ってきた日本の建築保存技術も実際に目にすることでよくわかったと言っていました。

城内を探索していると、途中で雪が降りだし、スライレアクさんはとても感動していました。カンボジアでは気温が常に 20°Cを超しているため、雪は映像の中でしか見たことがなかったというのです。初めのうちは雪と記念撮影をしていたのですが、だんだん激しく降ってきたので、私の伯母の家へと移動しました。スライレアクさんが「すごくきれい、でもこんなに寒いとは思わなかった、部屋の中から見るのが一番」というので、思わず吹き出してしまいました。

伯母の家ではスライレアクさんに日本の行事の話をしました。中でも彼女が興味を持っていたのがお節料理と門松です。「数の子＝子孫繁栄」、「エビ＝健康長寿」のようにお節料理のそれぞれに意味があること、門松は悪霊を払い、福を呼び込むために飾っておくことなどを説明しました。実際に街に出てみると、店先には門松が飾られ、お節料理のポスターが貼ってありました。東京のキャンパス内の寮生活ではそのような光景を目にすることはないので、正月という統行事が浸透している様子を発見できて喜んでいました。

２日目は伯母と３人で男鹿半島へと行きました。男鹿は日本海に面したところで、なまはげが無形文化遺産として有名です。私たちはなまはげ博物館に行って、その歴史や行事を館内ツアーで学んだほか、なまはげの衣装を着てみました。なまはげは鬼というよりは、その年の幸福、無病息災を連れてくる来訪神であり、その根底は様々な日本行事と共通しています。スライレアクさんは日本の伝統文化の一つをその由来から詳しく知ることができただけでなく、館内ツアー中に実際のなまはげを見て泣き出してしまった子供を見て、確かに初めて出会う子供にとっては恐ろしいものだと思う、と納得している様子でした。

その後は皆で温泉に行きました。カンボジアには温泉がなく、他人の前で衣服を身に着けないことに抵抗を覚える人も多いのですが、スライレアクさんは日本文化を体験してみたいと言ってくれました。夕方だったこともあって、温泉は貸し切りに近く、２人で２時間近く入ってしまいました。スライレアクさんは露天風呂の景色や温泉のいい香りがとても気に入ったらしく、恥ずかしいという最初の気持ちが消えていったようです。その後も日本にいるうちに４回温泉に入ったとのことでした。

３日目は私の祖母の家を訪れ、日本語と英語とカンボジア語を交えながらいろいろな事を話しました。スライレアクさんは日本に留学していても、学生や教職員以外の日本人と話す機会はほとんどなかったことから、伯母や祖父が普段どのように働き生活しているのかを見ることができて、大変勉強になったと言っていました。今回の秋田旅行では文化の他、そこに住む人たちとの交流が何よりうれしかったそうです。帰り際スライレアクさんは私の親戚全員分にクロマーというカンボジアのスカーフをプレゼントしてくれました。それは家族の宝物となっています。

なまはげ博物館にて、衣装を着て

-ISEP 生の留学終了報告：コロナ禍での経験

トリー・スライレアク

帰国後にアンコールワットを訪ねて

日本での 10 ヶ月間はとても充実していて、あっという間だった。東京外国語大学での最初の学期（2019 年 9 月から 2020 年 1 月まで）は、キャンパス内の学生寮に滞在し、教室で勉強をし、先生方や友だちと会ったり、外出したりご飯を食べたり、普通にすごしていた。しかし COVID-19 が次第に広まっていき、次の学期（2020 年 4 月から 7 月まで）はオンライン授業となった。

COVID-19 の影響で日本人の生活も変化した。テレワークになったり、休業になったり、休校になることもあった。政府は常に注意を促し、ほとんどの国民は外出するときにマスクを着用していた。興味深かったのは、トイレットペーパーやマスク、体温計、アルコールなどの商品が売り切れとなったことだ。幸運なことに、日本人の友だちが私にマスクとアルコールを提供してくれた。トイレットペーパーと体温計に関しては、すでに買い置きしてあったので大丈夫だった。

この期間、私は食糧調達のため 1 週間に 1 回の外出だけをしていた。大学がオンライン講義になった時、孤独になるかなと思ったが、意外にも普段通りだった。それは寮にもミャンマーとラオスの友だちがいたし、カンボジア語科の日本人学生とも SNS を使って話していたからだ。

学期終了後の 7 月 29 日にカンボジアに帰国することにした。成田―プノンペンの直行便は運休となったので、奨学金をいただいていた佐藤陽国際奨学財団が別ルートの帰国チケットを手配してくださった。成田空港に着いたとき、普段は人がたくさんいる空港に、ほとんど人がいなかったのでとても驚いた。空港では、大学の日本人チューターと、大好物のうどんを食べた。日本でうどんを食べるのはこれが最後だと思い、とても悲しい気持ちになった。

飛行機の中では、真ん中の席を空けて着席するように誘導された。私はカンボジア語科の日本人学生が作ってくれたアルバムのページをめくっていた。そのアルバムは数々の写真とメッセージが詰まったすばらしいもので、感激のあまり、一人で笑ったり泣いたりした。

乗継の空港では、再び検温があり、37.3 度以上あった乗客は PCR 検査をしなければならない。成田から一緒だったカンボジア人 4 人が PCR 検査を受けることになった。私もそのうちの 1 人だった。検査は耳かき綿棒の 3 倍ぐらいほどの長さの綿棒を 2 本使って行われた。1 本目は鼻の奥に血が出るほど深く差し込んで、2 本目も喉の奥深くまで差し込まれまた。とても痛かった。検査結果が出るのに 10 時間以上もかかり、乗継便もすぐになかったので、結局そこで 2 泊 3 日を過ごすことになった。検査の結果は 4 人とも陰性で、空港の中を自由に移動してよいことになった。空港の中には乗継客のための快適な休憩所もあったが、やはり十分に睡眠をとったり食べたりすることはできず辛かった。空港では、Facebook をしたり、友だちに電話したりして過ごした。

31 日の夕方、プノンペン行きの飛行機に乗る前に再び検温した。プノンペンではまた PCR 検査をし、私は国の無料隔離所ではなく、有料の指定ホテルに滞在することにした。翌日、陰性結果が出て、パスポートが返却され、自宅での 14 日間の自主隔離をすることになった。私は留学前から借りていた、大学の近くのアパートに戻った。プノンペンで仕事をしている先輩が、テイクアウトした食事を持ってきてくれた。

その後、プノンペンから車で 2 時間近くかかるタケオ州の実家から父と弟が迎えに来てくれた。実は、帰国したことを伝えてあったのは姉と弟だけだったので、両親は非常に驚いていた。母は私を見て今にも泣きそうで、妹は私に抱きつこうとしたので、近寄らないように言った。家族とも常に 1 メートルの間隔を取るようにした。食事も家族と一緒にはとらず、部屋まで持ってきてもらい、食器は 1 日おいてから妹に下げてもらった。これまではコロナについて不安に思っていなかったが、実家に戻ってからは、私のせいで家族に何かあったらどうしようととても怖くなった。どんなに気を付けていたとしても自分が大丈夫とは確信が持てなかったからだ。

幸い、今のところカンボジア国内では感染状況はあまりひどいものにはなっていない。コロナ禍では大変な経験をしたが、この経験は私のこれからの人生できっと役に立つと思う。

（原文カンボジア語、日本語訳カンボジア語 2 年加藤日向子）

⑤王立プノンペン大学からの受入留学（2020-2021 年）

-ISEP 生の報告１：将来の夢

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」では、協定校であるカンボジアの王立プノンペン大学の学生を東京外国語大学の ISEP 生として受け入れている。しかし、2020 年秋に来日予定だったカンボジアのニュップ・ソピーさんは渡航できず、カンボジアでオンラインでの受講を続けている。

以下は、ニュップ・ソピーさんの将来の夢についてのエッセイである。

将来の夢

ニュップ・ソピー

（王立プノンペン大学社会人文学部国文科 3 年）

未来は予測不可能だ。だが努力や夢、目標は自身の将来への手がかりとなる。私の現在の目標は、在籍中の王立プノンペン大学を卒業後、大学院に進学し、カンボジア文学の研究を続けることだ。家庭の事情のため、奨学金を受給できなければ、教員養成校で 1 年間学んだ後、中等教育の教員になりたい。そうすれば、両親に経済的な苦労をかけることなく、少しでもおいしいものを食べてもらえるようになると思う。さらに、カンボジア文学の専門家として外国人にも教えられるよう、英語の運用能力を伸ばすべく、奨学金を得てイギリスやアメリカに留学し、英語の学士号も取得したい。それから日本で日本語能力をさらに磨いて、カンボジアで日本語を教えるとともに、日本で得た知識をカンボジアの人びとに伝えていきたい。

とはいえ、まずはカンボジア文学の学士号を取り、専門知識をいかせる仕事、たとえば、私立学校の非常勤講師や、中学生の家庭教師、出版社の編集補助などのアルバイトをしたい。また、小論文や文学作品の懸賞にも応募してみた

い。とにかく夢を実現させるためには、仕事をえり好みせず、一生懸命働いて両親のため、そして自分の学費のためにお金を貯めたい。

私の本当の夢は、自分の両手で抱えきれないぐらい大きく野心的だ。それは 2 つある。

第一に、プノンペンで大学教員になることだ。実家からも独立し、自立した職業人になりたい。故郷の村の次世代の女の子たちが私のことをロールモデルとしてとらえ、一生懸命勉強するようになってほしい。

そう願うのは、私の出身地では、ほとんどの女子が中学 1 年まで、よくても高校 1 年までしか学校に行ってないからだ。女子の多くは中退したり、若いうちに結婚する。夫婦でタイに出稼ぎに行くが、貯金をすることもできず、17、18 歳で離婚してしまうことも多い。小学校の同級生には、貧しいために学校を中退し、育児をしながら過酷な労働をしている女性もいる。誰もが、もう一度機会があれば必死に勉強してより良い仕事を見つけたい、と言っている。また、高学歴の女性が実家に戻って結婚するのを見た村の人たちは、娘を遠くに進学させても無意味だと考えるようになるのだ。

第二に親孝行だ。両親や家族を十分養えるようになり、両親を飛行機で海外旅行に連れて行きたい。また父は僧侶の助手をしていることもあり、母と一緒にいつも寄付をしているので、その費用を援助したい。子どもたちが援助しなかったために、両親がお寺に行くこともできず悲しんでいる家族を見たことがある。私はそのようにはなりたくない。

いずれにしても、あまりにも欲深くなりすぎないよう、そして、常に謙虚であり、社会で尊敬される人になりたい。

（原文カンボジア語、日本語訳　カンボジア語専攻 2 年　加藤日向子）

-ISEP 生の報告２：外大のオンライン授業を受講して得たこと

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」では、協定校であるカンボジアの王立プノンペン大学の学生を東京外国語大学の ISEP 生として受け入れている。しかし、2020 年秋に来日予定だったカンボジアのニュップ・ソピーさんは渡航できず、カンボジアでオンラインでの受講を続けている。

以下は、ニュップ・ソピーさんのオンライン授業についての報告である。

外大のオンライン授業を受講して得たこと

ニュップ・ソピー

（王立プノンペン大学社会人文学部国文科 3 年）

カンボジアから東京外国語大学のオンライン授業を半年間受けてみた私の経験について述べます。

まず大変だったのは、インターネット環境とクラスメートや先生とのコミュニケーションでした。プノンペンにある私の部屋は、普段のインターネット環境は良いはずなのに、時々接続が不安定になり、接続が切れてしまうこともありました。

またコミュニケーションについては、私の英語能力はあまり高くないので、授業中に疑問が浮かんでも先生に質問するのは勇気がいりました。自分の英語を理解してもらえないのではないかと、いつも不安でした。同様にグループで議論をするときも、あまり発言できませんでした。ネットにトラブルがあり、先生の話があまり聞き取れず、うまく話すこともできず、結果として、積極的に意見を出すことができなかった、というのが最も反省すべき点です。王立プノンペン大学（以下 RUPP）のオンライン授業であれば、クラスメートとも自由にコミュニケーションがとれるだけでなく、私はどちらかというとリーダー的な存在ですし、授業でも積極的に質問する方なので余計にそのように思いました。

次に良かった 3 点についてお話します。

１つ目は、日本人だけではなく、韓国、ベトナム、フランスなど多くの外国人の先生方の授業を受けられたことです。先生方の講義には基礎的な説明や事例が含まれおり、グループ討論の時間もありました。毎週の課題も過重なものではな

く、授業内容をより深めるためのものです。また先生方は、懇切丁寧に教えてくださり、どの学生も取り残したままにしておかないのです。

2つ目は、これまでRUPPで使用したことのなかったZoom、MoodleやLinkedIなどのシステムを使ったので、これらの使い方も習得することができました。さらに、外大や日本人の先生方との連絡には、メールを主に使用するので、私もメールをきちんと使えるようになりました。

3つ目は、ともに学んでいる留学生たちと仲良くなることができ、彼らの出身国やその国の文化、言語について学ぶことができたということです。特に日本語のクラスでは、クラスメートとディスカッションするためにFBでグループを作りました。何かわからないことがあれば、誰でもこのグループの中で質問することができます。冗談を言い合ったりすることもできるようになりました。クラスでは笑いが絶えず、たとえば、私が地方の実家で授業を受けていた時、ミュートを解除して先生の質問に答えていたら、鶏やあひるの声も入ってしまったので、会話のテーマは私のことになってしまいました。

以上のように、外大で学ぶうちに、英語の運用能力も自然と向上しました。それだけではなく、外大で得た知識や技術をシェアすることで、RUPPでのクラスメートからも頼られる存在にもなることができました。私は以前よりも自分に自信を持つことができるようになったのです。

（原文カンボジア語）